水戸黄門光圀公物語　一

字

中野蔵書

河起積書

きりえたや物語　一の巻

河起藏書

いつの頃にか按大納言にて大将かけたまへる人の御むすめ君の
ざえにもひいりたまひて人がら世のおぼえもなべてならん
とのゝうへがたなどうるはしくあまたの御方ならぬに
人あれぬ御中のうちに物おもはしさぞいとつれづれなる
小方なる殿のしものへひとりに源宰相ときこえしが
御むすめあまた殿のしものゝ御心ざしはいとしもきくもねど人より
さぶ子君をあいとしうかあたらし御ひきこえまつるに
いとゞよになくむすめをとこまさへうまれたまひけるがまた
なくまゐらせ殿のおぼひきこえまへり今ひとりは藤中納言
ときこえしがむすめ君殿のしものへ御たちかも姫君の御

九曜文庫

うつくしげなるさまもありしかば清げにめづらしく思ふ
清らにおはしかしづくかしうちの御方清の
いづれもいとしもすぐれぬなかをなん清ならん くち
をしかりけれどあやしかりけど今は君たちの清げ
うれしうておもひなやみいづれの御方をもとてかしこま
この君にきこえなどして御前を清方にあかしつきにてかし
君だちはうちはいづれもすぐれなくて清らたくおはし
このとのゝ見えてこりもたゞうつくしこのしなきをなかし
あなかましかば心すらなりましを内くゆくおもひ出なきぞ
いとよりなるなかでこそかなしこのと見ゆる御うちの

この君にあてにうつくしくなまめかしきさまして見え
なほ唯きみにおなじくとほこりかに見えてもあくよかく
あてやかにもこぼれちるあいきやうなどぞ今よりかゝるこの
なくこのしなかるいづれもすぐくそとなびなまゝに
なきみを請ましうこのえぢをのゝしのひゝ女房など
かたにもこし御まへときかは見えあへずもなく御ちく
とのもうとく気色うしくのゝなかしくすぐく御ふゝなか
かしまつきすじもそしへきこえまへどなかしもうけんたく
いとえづらしとのゝなかしく御帳のうちものゝうれしも
いりつゝ孫きこひなあそびかひあわひなどしあふをとのは

いとはましかりけるにおかしのなひくかすまいなさまへば
そてくに涙をせきあかしく浅ましう清ましとのこ
あかしつゝたゞちらへ御覧のときこぬにむげにちひきさらに
などなぞ見えぬきこぬ女房などの御まへもまゐれぶ
御几帳にまうちかくちづらしいらしとのこおかしくるを
いとめづらかなるさまにおぼしなげくに文帳きみにくまり
いと見なくてさきくうちやも殿上のあひだとにのこ
つとおかしくさうきめのとごともさらにべなどくまりにち
などそのこ殿てあそび給御いで給ふも人くまゐりてさ
つくり笛ふきうらうひなどさりつゝもえしり出なひく

とかくもおもふ人もなしへきこえぬこと笛の神もはしう啖
さてひれかしのよ殿のうちまいしうらうひなどし
御よそまゐり給殿上人上達部などぞめでうれしこ
きこえてうちへにそしほひてまりそ此御ちかくのそば
帳きみときこえしにひかすありけりなどぞこまおもひ
あつる家の見あひまつるにこそさりとめてもさらしまへ
人くのまゐるかにその御さうぞくなどし御よそほどまかり
そしり出なひくうく童あそびまへぞ中くえせいし
きこえなにゝぶたゞ若君とのこなひくなうしうれしこ
きこえあつるときおもはせてのこ殿しの御心のうちぞ

いと浅ましくつたなくそりくだや（此洞をもて拙窓の名とせり）となが
されたるいひくてもとほなれどいふ今あのづらなど
なぐさめてきてもなずしこそかみゆまりまゝど様あし
春なるをこはいかゞきこれとよくもかなげゝしきより
わつのすなかりけり去れともさし月きざがながしえる
こともとのごまちまつるをとほくながめすゝまじく見
えてまことに殊いとめづらしきにたあしなれ所さて地ぞ
しのび名今ふうちびる所ありきもつれなきわどの所
よそかしきなれば波ひろく流れて西ひんがしのしろり
なる市の小方をも海せきこえて波を立のうてなにみゆき

そのほどいとかぞせうも名ることもにとらしもほすしなくびて
ゆく小方のおほせあは様くちをしれすなりけり　廿八日
づらうせなくうしひなむ君うちとも今はやぞてきこえ
つけくえきみ暗きみとぞきこ由なる森のつれく所
ともの所いさゆくのどやかなるひかつらし曉まちの所うし小
さうりまつれば御帳のうちかぞきうのことをものびやうま
ひきすゑいまつなる女房などこゝうしまゝもなく暮
もぐろくなどうるくいとつきぐしげし御帳をしゆりこ
かどくのさうとれてはさうなるものみほひも所らんせよ
うしごうちなどもあまりいふせくおすくまじくばまゐらく

絹とやうでゆふをしらまくぬまへがなぐしはなかに七八までうりあまりそれが花すゝきのかたになる秋乃ゆしきなほえくすそつきのなよくとなびきかゝりつゝねぢれりに扇をひろげたるなどこちさしひたる程とかにあるでこそ前うつりけれいましくへのうつや唯となびくめでたきかたにかくしもやあまさりなんと見のかにつけたふ国もされてちかくより搖てこふいらづくのこゝをありえてなみなうとなるこを一目うけてなくしをうきすりまへがいとちづしげになびしのつるなあきあせよなりくなかの色ハこゝぞいの咲なるやうにほひつ

○なまめ
目つきし

○うつくしければ
実ハ男君
なれば

○白くおびてしらう
はえてあまり
こくしたるを
なほしたること

○そのやう
やせがたな
ことさし

添もおちあぐく見ゆるなまめのいとふくよげなる影にいとど影もこなたにつくぐくとことくなく気に見えなりあなきるハうつくしければ清くるひけさうしのつねなどなぎともいとよくしたるなあひしなひさひ縁もあせにまつられくろはとひねりかけたるやうにこがれかりつらううつあいきやうづきたり白くおびてしらうえてなるハいとなうとうりなりうつてこそ見るべうりけれと見ゆ十二よあまえもれどうこなりにあくきなる所もなく人がらのそびやうかくなげのうしき中なでうきりなれやさくらのはなのなよやうなる二月ばかりにえびぞめのありぬのうちぎあきらひ

○出世
子のすそをかり

みだれごゝちをまどはしあつかふ人からにとてたやすからく
袖くちすそのつまゝでおもしげなりいで給ましや尼など
なくひとつにそのころのいとなさにてやうしづきもさまゝと
えなつゝもくちをしく涙にうきしづまれける
（横笛）いかなりしおりしもはつゝと出家にも此世にいとゝものを思しき
西のたいにまうりあつて横笛のこゑをこゝろ修すなしき
そこにひさうのわりくきこゆるに家こそ処もそゞろしく
めつらかなりこゑもさなりときくあつきみさゝちもうき
こゝろやかれどさりげなくもてなして君の御うへを
のぞきまへがうちうしこまりて笛はさしをきつさらく山家

などこゝはいろくなるにとつぎのおりものくるまなえび
ぞめのおりものさしぬきゑりくはいとみくるしからに
いろあをひいきしろきまへらくしういつこ
とおくあさぎやうにみほひこちくあいきやうにさしぬきの
もそてまでこがれおちてるやうなりこちなほしく同もおなじ
うるくまでをうちえりにはおつるなども物のおかげうきも
たすくもうくうちえ給ふにはきぬをあなたにいうじこゝろもと
の女はくうしつきとてたらんかいうえうりめでたくうつくし
うらんとおゆつかくはぐしもこれはもえこそおとも
これすそなどは扇をひろげたらんやうなくまゆにすこし

○さてもこれハ実ハ女房なれバこそ

ちゞまるかどにこがれうまるゝやうだいかしらつきなど
そすゞとに思まゝおほくぞ心のうちハくるしきやいとたかき
人の子どもなどあまたおほく甚もくろくうちもおやうかに
まろひのつまりまり小弓などあそびもいと多つとに
めづらかなりあないろじのこゝちやすてもこれハうてある
づまるりうハ人ふともかくもきよめるべきことのわざハ人も
小せあく女ハこりかたまるべきものもなかりこゝもほうしに
おしへ人にまじらハせん世の世をはじめませんとて
ようらめとおぼすも心くハみきゝもあぢきなくうえより
のきくせなりけれバ人すこし心ゐあることもこそまきらめ

ほいなき凡心なしぬをのみこそなげくつにまなびて世を
なんがよしなきよなどおぼしくづく世事仏ゞつかなり
ゐるもくせうなしと之れくおぼし知るゝ今の君だちハ
あめづちしげけなくもあるをこれハいといみじくかより
それぐしくきえうしとくおぼゆけの浅しうくみなひらで
なよ路笛の神も天地をひゞかすまつる事いとめでたう
なりどきやう（讀経）うちしうらひ詩などもんじまつることハ
多ことにそのえもくちあづくなることとすれあてしなに
ごとをもさるかあゝあことなれバありまるをくのえおぼしえゞ
なそいとかしうめりかる浅まくちをぐれまつりすやく

おうわり
無常し

世にきこえしうち来る中もすぐれたり何ごとにもよくも
いかなるをいまだ修上なれどもせきせばまじらひせあらず
をつきせばゆうしげらせなびく大将家にもすびく御
帝しきあれどいとゞむかしのつゞき涙ましくこゝろうし
われはいまだいとけなき程をそうしてありしでかな
をさるゝはすゞし免かなさじとさるかなんとくうかりをさへ
をしく偏にさせてとくくをとかびさせく まゐらんべき
まかにのこすびく御心しぬあるにさへいふにきこえて
まゐらせあそうあるべきかゝねどありとてふずきらず
あるにまうせくあるえぞりこゝもきぬの世のことなあふる

たちまちにてもこのしかるべきちぎりこそふとひとかずに
あがしなりてことしは裳着は元服されくといそぎし
あるにその日になりて此殿の御しつらひよのつねならで
みがきたてく姫君らしなりかひひんがしのたいつくり
まくりあかしのにはこしはゆひあるうそくしうるはし
禄ぢけするときはぶにうつりいまくあかばなるべし
うるゝしけれどもをきくるは人はえひまづきすなる
ねぞず客君姫君をそひさべきひがあさりなると
のこぞおちの始なるまもくくかしく老ゐする人は文
いそぎうちいそぐきこえのまゐらせねばなくく世に老ゐる人

なれぞいとよう侍る なきみの琴ひき給ふ そのくはせうと
の大臣家ぞ しかるにあげまきのうつくしさはうまそ
なにもひきこえしみなれど いとめでたき世にかくれなきの
しまつるを ひき給へ おとゞのめでなり給ふことあり
此おとゞは琵君のかぎりぞ他人もちまつる大君は
うちの女御 中の君は箏の女御 三四の君は ふでふく
おはするを かくづく こ方ほしく おかしく ろくども
おくり物などきくにもまたなききまうを給ふしまつり
うちありはまうよりえまつりしうぶたけみの君ときこゆ
やごく さうの秋のつきめし給後よなりたまひぬ

みかど琵琶をえしめなれく あめのしたのせとこ女御君
をひと月もえきこえてはあくよかくいとしき人の名
べうめりあかしと見あらせなる事せんづしなき人の際と
いひながらいとたくひなきものとかりと見えく琵琶の
者も流れいづるかたのうちにもうちのうちにもえうなく
ひきかへ箏のあやつりまで世にたぐひなくうちなりまひ
まじらひなる者のうつくしきうちにもなるものなく
くもりあるづき者なく世のありさまおほゆけ
ごとをききりありすみのさしまづくことくに
此世の人のともあるぬを父おとゞもさはいでせんなきに

ことにいふひなれば今にやうくるなるにつけてと
うれしくうれしきこともおぼしなぐさめゆくを
此君程なき御祝ひかぎりには歌方のいかなるかどもたどらば
るたぐひもあるにこそなど思ひやく歌心のまゝに
とて御しるまほしかすぐしつるをやく人のかきかたを
見まくほりして其の思ひきまさまにかくいとあやしく
ゆましう思ひかゝるまゝゆけどきりとくいかばあるあるこひ
えしもきずきやかなればなどてめづらかに人まただひ
なる方にうとうちひとりこれて其の御げうしきまゝに
方をとてさまあく其のどかうとて思ひあつてまじらひ

○若いちとの君　実ハ男君也
○うきは　帝も玉鬘も　あり

なべてよそひなどいとめでたきをその時の
みかど四十よそぢばかりにいとめでたくおはしまして
美后は廿七八ばかり御かたちなども又きよげづき給ふ（玉氣）
おはし給ふが此いちとの君の御かたち名たかくすぐれ給ふ
きこえ給へばいづれも御心をかけて給ふとあれどせんかた
なれば其の君がことよせておはしもうけばいかずまゐり
かもとてうしつれてあるましかばいとしき御其の思ひ
あり　みかどには世なひなし后の御かたに女一の宮ひとり
おはしましをあはれにいとしき事に御目たかしげ
とてかしづきまゐらする方なりさでに

うち数にもそとこみとのおはしまさねどあめのしたの
大事なく思もくとはいの里ひ方もなし大臣どの
女御せんでよくてまゐらひあるめれど一の人のはむすめ
なくては后にもえなりたまはゞみかどは此女一人のほかすと
朝夕ならしめてあかしあげなく此侍従のありさまの
この世のことゝも見えずなりゆくをは家のならしかるを
せまもやと御らんずるひつとふ御目ぞうるほりならしかを
などのえうくしうぬはゆやまじいとゝうくあなかなかし
まほをいまうとの君のさぞありめでたうおはすみ見なりびく
あざましきはまや御らんぜられんとまじいとものげなき

などもをとしものぐし姫ほどに見なしてなどぞなかし
あしろる気の御たしをもりきてあまゆもとのを
むすうちさはぜくあはせうらざりましかばいかにめい
なくありうましうましとくちをしくいふきとのう
をとしほく思はれてぞきそのよ侍従の君はいとゆうしとく
うぞりのなどゆもかなしあるべうしきめでてうちゆかりゆも
ならくの女房などは見すごしにはげうせもて常に
一ことぞもいかでうけられしかなと見え志かうびろりようぬ
身をたひありなかゝありそめゆかる身をえもてうくし思
うなかくまじらはこそあれなまうは目のと海らんいと

○たとしへなく
是ハ表裏に
たがひたるの
之侍従君といふ
いたく異なりと
いふこと

まめやかなくとてもさあるをきらくしくちをしと
おもふ人なかりその頃のみかどの御おとゞに式部卿の宮と
きこゆる人の御ひとり子の君此侍従の君にはかうぞうり
のこのかみなくうちありきも方いと侍従のおとゞにてそかほ
はよなべての人よりふこよなくきよくあてにそとうし見
つまくたとしへなくうらぬく海なくこのましくかよび
おほあうしくて思ひいつぬうし見心ぼそくひとの唯君
宮のおとゞの御の君寄くに名さくいつもおもとしかも
そもいそでと思ふ心ふかくてまつきさより あながちに
きつねよりて心のうかりきつくしいても見かれど人ぐらの

いとあだなるに宮のこともあなゆかしといづこゆきなどし
たなびくうゐりける人もおほ見ともりかくなげ見つく
此侍従のあまりいろしくよのまめやかにこゝろ至らず
をさあめるこそあまりきうくしきやうなれど見るめうち
の御かたちのおくあいぎやうこぼれくうつくしおはしまお
なる女のあまりふかと見なれびにいろしくおもひ見を
いもうともこゝろふしのゝめ女は今ひときぶ
まゐらんなどおもひすゞふ見をてまつりて心ゆくきこゆるも
世ぞなびしきまに唯君をいとよくうちとけておとひ
あまる時は源氏もつまなどらうへかきかはしつるまた人なり

まだゞくあはめ也するをいとおしきあやまちにこと人よりは
なつかしくうちうちふるひながらそれはいとうちとけもなび
られはうちいづることゆへ人の心もちのよりかゝりはなか
ことのこたふるにも母うちつゞければいくらもありらんば
まとまかなりども心にかうしきのことゞかしするを
神くうしめしと思ふどもつまじく思ひいくらもきこえ
宰相の心ぐるしきを思ふごとかも
（侍従）たくひなくうき身をおもひしるにさやは涙のこぼれておぼゆ
とぞこそへまかりしかれどかすかなるをまつそと思ひくらん
ものへどもろなかればぞ思ひけなくとてすくようなるまも

みくぞうちこれぬるうるわしに
みかど御おぼえもいかばかり久しくありぬるにまうできけり
こそはあらめいみじくもするためしなくやはとおぼしく
東宮に御位をゆづりたまひて女一宮を東宮にまゐり
たまひて故御門は朱雀院におはしまして大殿も今は
よはひ七十におよびはやまひもおもくのちおぼさるればなくし
おはしますこの度太臣になりたまひてぞ関白しまよ
くぎやうつぎつぎになりあがりて侍従三位して中将に
なりたまひぬ大臣どの女御后にておはしたりぬるをあはれ
くちをしくおぼしてこの中将の君人がらもいとこよなき

まゐりくいきうあさくしくよびたるなまめいたれども
きこえぬにまゐらすあるべきなくねがそもそもおぼしさだめて
父おとゞもきこえすべきさうしとおぼしなかなかうは
いかにいひてかあるまじきことにはそのせんとおぼしていかなる
わがみにはよづきたる心にはゆめにも給さめるにはさりとも
まめやかなるかたざりのいとよく人にゆかりせむる色好
此より脱字（あるべし）とのに給とうけひき中なひつ水の方にかく
ちんとのおこにこめうしうむ人のむすめのあやしけれど思ひ
こゞあいらづきなくばぞうちなうかゝく人目をよのつねに
ことてなしくいでいらせましとうちなきくよれしらこ

ありとのたまはすいとよくおぼしれば うしろめたうぬ
色なれどあるなくにはまさおぼしつくもあらぬさまなれば
いやしくて此姫をうせなりたまなまもおぼしけれ
そのこどものなかにもこのゆくへのきさなかひまさもが
けさうのさかにこそにとく
（中納）言やさしいひて忠けれに際なるむかしを思くまとふるに
ときまつるえもいはれめでたき見ものありけしのやどを
おぼしめいかでうりかへとおもしくも蔵にも源くされあまた
ちのおとゞにはいらうしくいひおもはげまつる手なれば此なり
ことそのうしくうせなりあまた

此哥ハ古哥の
まじふとある
と女君のえけ
男の子とり
申してある也

女君

婿とりよりいかなる道にまよはんゆく末もおもひたちこちに心
くて侍はおもきこえなくは見もすてなをしすなれば
その日とおぼしたちけりいとゞ見てとおぼれかしおぼす人
なくもだれていつゞきこえなくれむすめ子おぼえんこの
三位の中将をとりませおはしきありさまなどども
めにまつしうんやはたゞ人の大納言なくなりければ次男に
のがりく権中納言なく重責うけのひついとゞなをやうに
めでたくもあらかなり式部卿の中将もうけなく宮まなに
ありなむぬれどさくげなくしつる人のひとたびは〳〵隠
なりにきかしつることをよろこびもかまどもおほかたに

○隠中なり
引哥也
此古哥の隠
中なり流を
いとゞ世はへぬ
ふたまなりけり

ゆかしあるおくはすこしいとくらしけれはなげきためる
を中納言はなぞやかくおもひする人をうらめしく思すに
えでとおぼしくおもひのなかり中納言は十六女君は十九なぞ
おはすればうちも一ちもあるなかくよそげなるこし
よりはじめあつかひなくめでたくて女君うちよりもこよなく
そやおもはおぼしいづれつるまゝ心おごりも人あれど
うちなきくゆる中もおぼしいづれ君とおぼしつるにこよなく
あきたらなる思ひ見を心しれずこそいはし添へを
やはとのをとこのうちにはうちなげきもながらも人が
のいとをかしきもくれくとまし見とておかしもなくたゞ

○えひる人とは
これの事に
中将の事也

○うき名も俗
俗にもとゝ

いとあはれげにうちなげきて見なれまゐらせしもなど
されはかぎりなるの衣も人目をはゞかりうちかへしながら
かゝるにひとへの色ぞてはこまありくこゝろならねも
深くいひて見る人あらむいと人目に見えくいまめかしく
まつものよことにことなくてあてやかにめやすき
などのはからひに見ゆるにかへりあらぬこともなけれはあり
春を幾千代かさぬともあくまじきを思ふなれどよりふと見
されど男君にはまじいともとくとのしまつださこそはきこし
まくとものはくましくあがきすくなありなど清らもなく
ことわりくもてうつゝかなる世にたぐひなし　又けさう

深うぞあや
しく
実は女君
忍ぶ月の
さかりし

かへしくゆきたれかれするかしえてゆめになくあ敬
うちにはあそびなどよりはことなるよがもなれども
なかぬをまで月ごとに四の日ぞあやしくわせえやまひの
人に見えくほころびつきにあらぬをともく宮にあこ殿
おくの紛れぶとくは見のとの様やにおひかくもをすぞ
いかなるすぢとふとゞる一の中を聞りける九月十五日
月いとあかきにはあそびにまうのひくはとの中に夜梅つぼが
の女御のまうのぼりなるをとゞめ給ふと申しくにあくる様ど
萩つぼへとなる色いの見すりに立ちく忍く見れぶふけぬる
月のくまなくすかるにひとり（火取）みとるいかのこゑあとあふ

うはさめくはしきなめり すゞしとおりなるに 繁いと おほ
しくかゝりくあゆみ出たり 女房もこゝかしこなるきぬに
うはさめくかきぬぬれたりけり そゞろのそらおぼえて
おかしさ見ゆるに 女郎花は流れ隠るゝふしくさして いと
しくをかしげつゝも あさ春の心ゆくめでたきを
あはれこれもよのつねに君をも心をもとてましかば
なからへてぞおりのがらまし あないとしひとおもとく
かく君をあらぬさまにもまじらひありくはうつのまし
すはあはれうしとおもひてくるにうきくてまた心地して

中納言
月影はかくてすめし雲の上をあはれいかなるちぎりなりけん

これこそはちぎりつくしなくてさらぬ限恩ぞによのつね
ゆくゑのまじらひしなはましをあるあまりなきま
君をなげきてもひとりはよのつねゆくおりはとえてこそは
ゑのおりのがりのうしつれもせまししかどこゝ君ひとつの
ことをおもひはゞくるにこもりいでゝやゞく嬉しれ山に臨
旅なかりしくおぼゆるまゝにこそなり見送りもくあり
つるひとりごとをおもひつくるほどにかゞらひそらの月と
こゑはなるとのおうすみのがりなるを宰相の中将もこよひ
の御あそびにまうのぼくたゞ今はずひとつに大との
限恩のいつとをおもひこがれく例のおもひなくとも此中納言に

ひとりごと
月影の
前に

又との
本に

○まうでたれば
詣のまうで
たればなる
とし

うららもしまさにかきくもりけはひもみなかしきにも
なぐさめんとおもひてまうでたればありぬるをいけくのくま
にたひらかにてみえぬなりなんとうちいひありけれはさるに
此声をきてまとひよづまくをみれはおりとのまへし
すゝめけるくれなゐのはやこがるゝえうりなるとぬれけく
いときやうにみゆれどとくおもしげなく月かげにひかる
えりめてゝみえくつゆよりもうちしありつるもまし
かし此袖ぬれぬるをうすにのあはれにも似ればまたかき
うそりなるとそのこのおもふにめでゝみゆるをまいく
け人の一ことをうけようんときゝよのよ人にあらじかしと

うらやましくもが身よりしかれどひたそめくらりなん
すそうらみいでもいとえんにおかしうなるめきすなはち
かくうれし人にいはゆるきづく身にならふしそめうるひなど
せばいとあはりそのどれくのそとてそくるにかも此人えり
にかきしきたちざらあはれなれがうつのきのこまやとなでて
ことすれはつきくものうしりやうきからうつめはしかれどに
くもりうえひきこえさせる折くはるれどうづくにに
まうでつきうるなれことやくさくのうけたまはるをそうひ
なくいとかしかれとうちなげかれて身をそひえりつるなどり
いくたびもいるかしれうえりさりつとなげかる身になぐさめあるぬ

（○是又朱雀院女一宮の御事也）

こゝろよくもになげかしきなるらむあまりことさらびまめやか
なるもはしたなきことのあるなどありける人とてもあらぬに
ありとはきゝぬを君のことにそれぞめかしていかばかりの
とのゝくにおぼゆるなんこの后の恋文などの給はりそれも
此人の御為にはいとはしたなうありがたうべきなりといて
つゝむことある人のことのかゝに気なるなど思ひえうけき
どりくまかりにまかりしいひおかきむことに身かくても
たゞそれゆきとりくかなへまりてん深く思ひてきつまじき
とうきかくれよさんとも思へれば己が身にとりてきこえあはせ
えんかきらやもうりすへき御心ありとうちたゝひく

（中納言）
それとこゝろえねど月見ればいつまでのこりとのは出き
ところへするこゝろはしたなうおぼひあり思ひしらおぼゆるに
いまめかしきくせのやうにとなむ思ふく
（宰相中将）
それやそのおもふるまじき世中よくのことのそれ思ひまへん
いとつきうくのことはおしほ給へれば此御心しき見えて深き
山にふかく絶なんとおもふとうかゞへどなしもさおぼしけむ
時にはおもふかしかなはいかでかくて世にはあるじとそゞろに
おぼゆる所々し月にそくてもまゐり給へれどもきたべきえこそ
思ひたち侍らぬとあはれにうちとひあはしくおぼゆまうで
ても此中納言よろしめでたくきこえ給ふる中にも心ちえんけ

○院のうへ 後嵯峨院也
○姫宮 女一宮也
○殿御あづかり 姫宮也
○まゐりまつるは 女房のまゐりまつる也

二宮やうなる御よそひなどの女めくいとしう見まほしうおかし
くもあるなと思したかぞいとゞいもうとの姫君は思ひやる
なるゝく心をつくし思ひまどへどかひなくなずらひはきこゆべき
御しきなゝめをいふにせんと思ひまどふに院のうへ姫宮をやふ
立ゐなれくちうちもえ思まゐらせかはぬを御覧のとなどいひても
えうぐしくも心ばせある人もさぶらはゞ殿御あづかりはいとゞ
とのえうなくいとけなくのこおぼしまほをうしろめたくおぼつる
なくあはれしあげなきこえさせなむひく此大家の姫君もこどり
うちまゐりのさは思ひ絶てきこしめしをは御らんしつゝに
せぞやとおぼしなりてまゐりまつるはとのゝりなど二宮やうに

○御あそびがたき 御伴ひなる也

きこえなへついでに中納言のいもうとはいかにおぼさんとおもひ
おぼせられなぞと こゝろせなへ御例の程御らんじたるあるうと
ものつかれくいかにもく思ひまへ侍をやと申せど あさま
しうらうくえうしたとのに思ひく見え侍ればあはれなり
てもの思ひたぐへる人なれば尼などになりてそれうゝに
おもむけくやうなましとのこなん思うまへありにけるとく
うちなきなひぬるを心に世をのがれんとかはあくがりけりと
あはれに御らんじてそれいとあるまじきことなり 姫宮え
ぐしき人なくておのれを立ゐなれくいとふぐゝしたるをみ
君御あそびがたきにまゐらせまへ世中にそむくもあらば

○えは
当行し

御所にハぬのかいなんと御さるゝに中納言のすけおかし出され候て
これもまづきやうこそあらめとうきしなもめづらかにも
まづく御心こそれくハにまれどものまづらしハつきまつり
もやせんとて母なる人々のつましいあいせんとてまでなひぬ
うらくなどきこえまへるかいさやいうなくきすかうとえ
そひまあられてなんとのすくハ中納言のありさまを見れが
こゝもかくきなめうくようまづきかもやあらむ御せすたゞし
御の御さまさまりなみちもなかなんそのわかにめて候
事かくこそハあらめとおぼせどあらまーしともも御め
うちさハ花すつや御いの里なくにせらるおかしくハそと

○まつのうちかき
当家ハ帳元
かれがし

御せられしが十二月十日御そまゐらせまりなみなかごとかハ
あらあすあらん女房衆十人そこハ志もづかへ八人めでたくぞ
うつきたてまゐらせなみよのつきなどつき御まづらひかも
あらあかにそのすとなくてまうひおうんもそれらがれが内侍の
詰になりてぞまゐりあひ候当家ハなし並ニおかし
ませば御つかさハ宣耀殿にせまもうりえぞしまる
のがりくひと月御帳に御とのごもるにこの御けしき見あかり
いとくてわてかにおやどうにおかしまれ御そさころそいとしう
そのたぐし候まじき御心なれどなほ心なくうちとけたる
御らうしげきかそいとそのびくくてまるく御とのぬのなど

○すゝぎのひん（内侍実ハ男なれバはゞうずちなし）

○うへのあそゝし

いぐさしきなきひんなはいと味ましうゑひのかたにおぼ
されど見るめのけはひはいはゞうとましげもなく世に
なくおかしげにさそくとある人なりければまゆこそはと
ひとへによそれはあそびごきとおぼしまどはしけるよた
なくあはれにおかしくおもひなり記なども やがてうつのはつかに
にまうひおもひくまなうひ猿うき路ひきなど起かしとあ
ともに兄弟によろばゞ浅ましくたづらしれとのとうづれ
しかどのつもくばりはなまきもまきずたゞ紙しまめ今
とてもなづらはしきたゞひあるまじれなうたゞが家の宰相も
なほればゝ中くまひし紀まどのうちにこもりまつりしほど
こそゑひをたえずましかりしが中くるさにうち
いでまつるはいとう恵しれて夜ひるせんようでんのとうり
をなされば おかうとの紀しそも見るに紀きうくとてなし
うるさきおかうとのおぼえよなもいうしをいちなん世有
歌なもひなんとのうぞたゞひなるをゐとしの五節に中院の
此年ありなればたゞ人くをみ（小忌）なる中に宰相中将
中納言のまずりいとゞいうしく見ゆ宰相はいとゞうらに
をかしくあざやかなるさまして なまめかしうよしありて色
めかしる紀しいとおかしう見ゆ中納言はなまくゞと見え
どもくあくまじうおかはしきこがるたゞりけるあはれぎなう

○ひのくま川かゝる引哥也
さゝのくまひのくま川に駒とめてしばし水かへかげをだに見ん

何事のなきまゝとてなしかきかたもさかいつとかこやうにうつ
くしいとおかしきほどの人にこよなくぞらく聞もあや
なるをほうきの人くあかしと見るにこの事はいさゝかも
人のけうひする所はさてかも色ばかりうちこぼり
このおとゞいふも中納言は見るめにたゞひとく事まのゆきも
やさしくぞこゝらりくちなるをおり目に見おこせて色あるを
ひのくま川なくさめし水かへともうちあつゝく ことか見
おくらるゝ中にもあまりていさゝしと見ゆる人なるり こずゑ
ぜんのうちおくくまね侍る十づきすありかたにかしき
ぞろくまゐくぶなる事ぞとこはせあへぶれいけいでんの

○うきは家をたてる壁木に衣を懸きいひけるなし

西どのゝ一のくちにうちまゆ見こそゑくまゐらせよと侍り
つとくいとしうえんなるにぞありけりあなおほえな
とく見あくぶ
　あつとはなつてうきのおりもうめにこそ志川に見
といとおかしげなるをあやしと諫めんとうちほゝゑまれて
さかしいれかくりすもせばなきけなくいとかくしみに事
えてきな人もえつまりぬなに事あらん月のいとあかうする
かもいゐれでんのほそどのをとうたゞずみく
（中納言）あつかうなるとさかしのすりあゆもえつ心なく見るにもあり
とうそつかに人これもせば人もなれかやしと見ゆるにさいぶし

なる一のくちに
めづらしと見つる心はまかせてなにならぬ君のありやうはせし
とこくする御事もなつかしくおかしうなり さち
まりて
（中納言）なかうすは涙とまりてうれへくやこのよのまたもなきかうはえん
こゝろきのさりぬなりけるなどそこえうとおほくいひすさむ
けふひのちうまゐりきこゝあはれしういみじくあはぎやうづ
なをいとゞ心えておかしと見るのどやかにたちまつる
いかであらんといとはづかしくやましけれどよのつねの君に
みだれいりなどきこゆるもあらば女も女御の御おとうとやうの
人なまつしなでのわしきなかばと見つるればなさけなう
らぬやうにうらめしく人〻くる君をこれぶらちえみ
てもちあかれぬ御事に一日も見る人の心をつけくまち
わびさん所も人のきこえんするもおほくきこえごちくる
あまたあれど人のやどうちなごくいとそうしうあはれば
なさけなくぬほどにおくいひかくしきぬうきまぜの
ほどにおほくかくきくすごしいとこそすく物どわく
とてさきあまつるを女のきぼとあらぬにとるなみ人〻あり
此宮のあまりすぐさだたゞよりいひかりうちがひ
ありくをおかしと見る人あかりわりその年 たちかへり

○まゐりあへれば　后宮のまゐり給ひし

○うへとは　母君をさす

はいまだ渡殿ある方は東のみしきとのゝ見えざら

まじかる年にうすき雪うちちりおりしきわたしにせん

まうでんにまゐりあつまれるが中納言きみたちあひあひまゐりさとの

御もあひなくはいすしくはうくちの御いどころ山のなごり

ことのほかにうとくしかりしかぜ此ふる雨のおとにかえ

みなくびも御し家世もしらぬをよろづかぬなきぬとも

ことにいひあはせなかんよりはうららにうちかたらひつゝは

まぐしなかめといひえらせつゝなのくせよすけなかし

よりうすのうちにはいまおしうどことのかの御箱えぢに

とやのうちおうすの色ぞては様あつかりしを内にまゐり

○えの君は内侍の督のかみし

○例の人と見　きこゆや　実は男君　なれば別　男君にて兄君　ら見えたし

○ゆきは見え　御例侍の　女房し

なひてはありのかぎりの御しつ紀のかたにはちかくなかひ

えの君も世をおぼしよりすくなくおもなもゆくいまや

ゆえうし此姓えうりの色ぞてまくとのなどいとあかしうきこえ

なき世にゆんおりし君御けはひなどを家身にさるとのに

いひおきて此御ありさ母をずに例の人と見まうぞやと

あひんぶしうおかみえの君も此御ありさまを見えまうび

こらにもうちつかくうこらにおぼし見ずにつ此うち

じもなのつらきたびやじくいひなかうとうらんあはれも

深かりし御志のつらひはこうえいのありとのゝ御帳御きは見え

ある女房などは梅のみさをひとくうちまとひつゝとう

梅のおりとのゝうちきぬとつぎのみえの衣あひもよにいつくし
てくぼもなくなきまつるに中納言とゝきこえのありとみゆ
きしめたくれなゐのいろふかくはやこぼるばかりなりをいぶ
しくきやうにはいぬまつるうちはさよりもあまくしと
あまりにこぼるゝあれぎやう見えほしくなかりけなうと
いとたぐひなきを例のよくもにあくよなきこのゝ御心の
うちなれど見すにはうち見まほしくとの見ゆもらすなく
まゝ地しく御帳のうちをさしのぞきたまへればこゝ梅の
えんうすくにほひたる御ぞどもにこれなる袖りさくらのおり
とのゝこうちぞみ梅うちぬの御あつぎをもてまぎらはしまつる

○ことそへやれる
そへあひたる

○よろしやうに
五十ある
すりし

御うち中納言の御かほひをうつしとりたんれども
見るきぐうれまでうすひまつれどこれに今すこしあてに
うるはしう御面めきすこしやこまやかにをかしうたん御ぐしは
はやくしとますゞちなくゆたらかにうつくなけに二人
ばかりあまりまつるさま御つきの御きはぞよはずやかに
ことてそへやれるなどいづくもなく孫子うれするなど
なりを見すぐてにあるいましとさうちかきうりく此
御ありさまのよろしやうにあるかなあれましうぶさかれや
たかうしにかしくみえ山にこゝを絶あらんともあなう
しきみひいうすくやあまましくきぐれまつる御さまどもみ

つけくハらもハしのなも出しぬなくとゝろき渡てこなたへ
行く月いとあハれなるにことの音ハいづくなりける中納言の
みえの音にあハせくうけたまはんとてさうの路ことの
うしきこえなひく中納言に横笛なりける例のすゝのかり
おもしげなる袖のたもとに雲井をとほげくひゞきのかゝるやうに
おもしろういふしきを洞であげて給ふうきあハせまつる法
ことの音おもしろくうまれなれをありもきこゆる文の筆にて
まちきゝ月に笛の音も路の音もいふしのことや此世の
ことのねぬいもせの路さえどもなきうちありきらもくこそは
あはめときくにそろうになかれ行く涙のづくしもあらねど

月やのあまりをうちかへし見くそりそのうちに立ぞ見れバ
中納言ひえをみえにそりゝてそしゐて見くきゝませとうた
なしゝなり同とぞり帳なゝぬこそうびし八れしく心とき
めでたせらるれどおもくのうちくしきさ給しくいそ給たまひ
ぬれバうらなくくちをしうて涙をくようにありぬつと殿上
人んずちめなどまゐりて給ひめんあるかも宰相ハあり
つる路の月のさみにつ見くさぶらひなまめかもよの
ひと月その夜中納言の局らつしかハいらえりなんとの
ゆゝ中もそくまりなんと云ふに涙を袖にくちをしうて
琵琶ひきてまゐり給へりけれバたまひまゐ女房達中納

月やのあまり
引すし
おやのまやの
あまりの音きき
殿上ぬれぬる
人ひうせ
○とぞり帳なゝぬ
殿ハとぞり
帳をもまいる
とも来きませ
あとにせん

○宜秋門院の
引歌之
後とはいふ宜秋
門院の御事
のよしみけむ
ことのあるつぼね
の所

ことのかへそひとしう給はせたる人にはことなくそれ〳〵言を
いとあはれしうおもしとおもへりあれどことかれのうちにありてハ
はづかしき人の跡のぬしをきくにも宜秋門院みのとのまへすがたのゝき
なかつきよハかげなるをみひさびく霞られたる月のりき
かも心のそらかあくがるゝをながめさびく例の中納言
どのよりうしひくあかくきあんとおぼしくさきなどもつとく
しうもおハせしきのびやかなくおハしけれが例なれじきあ
やかなくうち故にとのみにまなうせすぬるといかゞあひなくくち
をしきうちつゝやまひうましなどかゝおはすきのことのある
うふきこえすゝまきとみくゑ漏りくさなんしとおもふともも

○さなんし
中納言の北方
なんとて

○涙ぞくもり
引歌之

○なぞのが
袖の名之

○いと力もなく
さやうなる
事也

はかなど心をうさしく人の袖くはかりにおりすゝぞうと
おもふ今とてもおもひあはせに心ちうちさハしくとうく
まぎれよりくかいだあがなしおちくきそのまゝあげく
ひきいでゝる袖をきくよりも月かげにいと涙もおほくきぬが
かくあまりかう川くしうおほめ兄する大納言内侍のうちと
きこゆるもうきりあれがこゝにはいくまさりおかんとする
それぞる名ハ高ハれどいとうくハおハぎりしをまあとか
いふしうもありたるかもとおもふ文たまひ一ツハ此人の袖
のうちに心ある心地しくえすきてもちうるべきとものも
せばう川し心もなくありにハれがさびこぼひいりあんと

見る人とても
中納言のすゝし

その夜ふくれば人々ハこゝよりかしあるハ庭になれく
ものゝけにあそびなどしてまへかを人もなれに路のうへに
きかれさりて活くぐくと月をながめて
（中納言少将）紫の車も見るとれとの月なれハ心ぼくしのかけとなり
とひとりごちたる父君とてもあはれの中にもそれたる思ひ
かぎりなかなり見る人とてもさぞかりめでてすゞろくゆき
まつらに下もなくいとあはれよりかなまぐくまあやうなどを
なまめの心ぼくしなまふかときくにいよくそぐしうて
なりたまひてをしあけてつまどはゐて入りまふを人ゝハ中納言
のおハするとそひておどろかあふこともなし

（宰相）きすゝもな心や月にうかれん心ぼくしあかけと見えなさ
けはひのあてなるに涼ましとあきれてみかを引いまなへを
かれいふかれて帳のうちにゐてつゐやとおなゆるやうにしまふ
をまへちかれ御前のこなたの方といふ人きゝつけてとのゝ
おハしまいつると思ひつるをいかなればとおどろきてまうるに
いひゐるさまなくいましきはけしきなりに志のびやかになれ
なよけはひなるをあなかしこやいとつゝくなかしまていど
志るねき身のかきなはちきりハかゝるにも有るぞかし
いまにおぼれとも今ハかひあるべきすかハなきまげなくて
そとこしらへありてその人なりなりときくも涼まじういとし

されどもさかひによひなされし人々がたに志らせじとおもひて
ゆまへにハいろせなひぬなりまたハゆまへにさきうりん「同」
そのむねをもよく見あらしまへといへだち几人々「あハせ
志らもんにてそといひなかりあそびいでぬなり女君ハ中納
言にかくめく人ハすのどやかにたづらしうちうらみよ
ことよりほかにはなきものとのみおぼえにいとをしうち
なきけなきことなしなりにて絶いりぬそのなきさづむけれひ
ありさまのうきけりあハれにうちとけなりにらうてなも
ひやきくあひ見ざんまいりなりにて粒中納言ハあやし
うける人なまいましうまめなるハ此人にゆきしのたびかき

○引寄月もおぼえ
あらしの月と
むかし見しらふ
あハ豆志らもん
人に見せばや

とのゝ見ひしをきゝことなりけるひじり字にこそありけれと
めづらかにもきゝなしおもはゆる人にしもあらぬ事をまいりて
さうなかうゆゑぬなりた錬いろも見ずけれがいでぬべきものゝ
世になどきりとくあるべきなくねがなく〳〵ふのかぎりなる
ちぎりくいでのよこちゆめのすなり

さる時ハ見にかうけれハさうせ川のむかしなう康小語うらかん
粒おもしきらぬこそうらなけれといへどいくも世にたまふか
いましきつらくもうらひくならえりくも美うとぞたえ
見ひさうによくとおもひぬ女君ハまして深ましううてとも
おもへぬふまどひにきえいるこち地しくなきもありかの子が

○ひじり字
小舟のいまだ
男子あひなふ
おもしきをふ
し

○よそとおもくか
さうおもして
おく声し

はこ地のわびしれにやなど人〳〵見奉りあはれに中納言
うちよりまうでなひくいりまつるにいとゞいそぎ見え奉らん
とおぼしきまゝにひたうたなるをなどうくにとおもひ
なぐはまへなる人よくより例ならばあはれましてとなん
きこゆれどいとわびしくふぐすしうおぼしくそひすなひ
ていふにあやしさぞ今まではせうそこのなかりしはなよ
などいとおどろかにあてえうに見あつらひおすつけくも
いとゞめづらかなりつるはしきにやと見ひ出られ給へ
みえりぬらくもいらなるはたちなどおぼしさふぎてまつり
ちらくなかやなやとさふらしげなれば中納言もうちなみだ

○立かへりひかずなき
唐土よりの
給ふし
○見せ奉らば
あはれを賞
みえせぬし

そひぬるくが帰つがことゝに立かへりひかずなきはそをそへに
見せ奉らば路頭するまゝに唐土の君に月ごろのこの
見ひにいよ〳〵うきいづるこゝちしくさびしくまことくなく
うてにいきめぐるべき心地もせねばこのくいとゞく
おぼえましかば今までいきめぐらましやにとおぼえく
こゝろもまじくとも尽きせずもなし后がことゞにおもひ日に
みそびきの山の西かきまくかなしなおとゝとりか
やうにとの涙とぬこゝちはえもいえばあてにおぼゆる
はしきしうものも踏ぬえうりなんたびかひしあらつれを
いとはかれば山ぐりと見奉りしたの心がはしらがのかの

ひ方なれことのえなどあつまりて出しげなるもいとをかしき
えなちかくいろめかする心にはさつれどいと筆のせなる
ことのもとそのまゝにいとしくながしいくせのひくにくち
例ならぬとのしまへがこのひ方なくそひなかしてさひ
なれまでにもえ此ゆことをひきいでぬよしをなかしき筆に
うれおこるはずさきもあるんうしときこえりぬえらりなりし
乎しきもさひいづるにらしめしさもさすらて恋しを
出しぬにさもおきあかりあなれせんまでもおほえばつく
ぐしとおきかしなげきさびてかまでも中納言のゆかりは
ええなぐらいらなりぬるまでとよありしよのわどもこそ中納言

もなれきづひらめあやしの人からはいとめでたくめもあや
にさぐもてなつかしうあいぎやうづきなどか今のうちは
あながちにさと袖てうちさはひたなちかくなまめかしくしを
とてなしそゝはなりつゝむうしとさひむすもいとめづらかに
ありがたかる人の心いとまりほうちやとあらんと思ひ
やるさへ此まうちかなげがいろに色つくめすまいでしばと
おもへどうけても歌に心をふかし筆のことのえをうかはさ
ばこそあくめましとてひさぶかにこゝろもいまづきせきもなし
さかりこあうしくあなかなりつるけそひありさまには中納言
のめでたくなよびうたになつかしうすゞろかなるよのことこそ

見る見れるの
涙のまのよも
見るかなるのと
まさまつり詣し

あはもよにつれなくみえつゝめもをばなげかくうかりし
とぞおもひあかさんとおもひやすに涙もそゞまされ月を見る
にも見るきものとひとりごちしおもひやるがかれこゞる
こゝちぞやるかたなくてすくとなつもなき中納言はましてそれ
ことおぼろくしうらめしかゝるかくゆけばあさましえ
こまりゐるかゝり大とのうちなどにまゐりあらんとてうく
のみぞあはれくしうらめしかゝちをありけ給らんなどこそいと
さハ心なかりあはれもよのつねにあきあかりなどしてこゝろを
まかせめなまけもあかし世にきこえあかせなくもくしつる
こそハいかまでとおもそくおぼゆる道のほかしゆもまず詠

よりもひかれそあらまほしう絶し給つもうてのちしづかし
あかるを見給へばいかなまほしくも給はゞとのあやしう
おぼえ給りとひくしをうれやりつゝなくくとおぼひまかる
ひかほに涙をうけゐるまゝのはしれいとしう気なり
女君いはかそしくあらくしきけひもなくさうち
うちひくさまくしつるの事なくもふそくふしまりて
もおぼえまりつるをよきが世にしるぬうれちきり世へ此人にも
思ひかりおぼえぬべきことゝおぼしつくるにこそも心
あかばいとゞかなを川いれくなれあへひしきなれがいえ
ぎりとしこゝもをあるかありなど人のきこえつるかゝと

いとほしくおぼしけれどうちあけがたくいとゞまうで
侍りなんとまつる人おほくきこえさせつけなどのある
かげなありしもぬゆゝしきのすがたといひとさま／＼
いそがしぬ内にまゐりあはれがなしの人の君はゆかしに
女房などめづらしがりきこえて日ころの物がたりなどする
ついでに宰相の君といふ人いはゞぞ聞きしものすべにあくぬ
弟の君にうらみきこゆるがものうしきにゆづりきこえてし
このことはあなつてかしこくしおこたりざしそくらひ
しとまで此日ごろは夜と夢見こそめやすく侍れと古海
やうにきこゆ兵の君その宰相は夜やうかうすりありとこそ

ほとのえくべに
引寄
あゆのすむ雲の
えゝゑあらく
にうゑんと
のえ人のいさん

いふありしうばにひたなくゆきあひうるさきまでおとづれ
人の此日ごろおほかりうかりけれいとわしくこゝろのすゝ
ときゝおどろかれく内よりまうでさせまへにうちより
あはれがうちきくにむめつくすとのうつゆかしおどろ
かれくなれあはれがれが日ころ御なやみびやうざまにこえり
侍くさちこゝろより侍つるがいふせきまゝ内にまゐりて侍り
つるにいさゝかあやしくありく久しきまゐらせあはれ
といふ人の侍つれがおどろきなどかたとのたまひにあるも
う地しくいとゞきこえなくぬかのうちなかくらさとこと
ぐしかべきにも侍らねどみだりがはしうおとりける

ぬる間ハかくうごきなどもちかくなれぬくせゆくゆでなとし
給ひとくこともなりぬ給りそこのとのしせさせなどひがさざ
うちまかせていつもうちかすれてひがけもえうつしこと
ぐしらばいひなせどいといつまなくおもやせてまめ
やかにうしなるを例ハみゆるよびてうるさまでよろづ
にうつくしみざるまにことすくなにありなるハ例なるおもはる
けなれどこゝちなるも例ありとみゆるもいとかしかれ
ど女君の例ならぬなやましきのあつかひなれば まことに限
なし御程例ならばげなり たゞ事のよどみおもしろげなる
までもやせおひみだれたる限はいとほしきのくるしきにハあはれいろ

○さきのよどみなど
うしげなる
後の紙の上こそ
おくなるを
やせおひうつりつゝまに
ことなる

あるはこゝちのみだれもぞとうち傍らくいひあてゝうちに
おもてあかむ心地すれどこまかにぞうちゑみよりかゝると
家ぼめきしいひちらしぬるなりもいと気あり中納言は殿の
まゐりする程まかなひに中だちのめのとまかせておとゞの
あやしよろこびくよくきこえさせよとのたまはせつるよし
ほのめかしいでゝなに中納言もうちつけなく心ましときくに
はかほのさとあらそなるをあつかしとおぼしするなりあると
きこえくさいつとこのほさかやとおほしう川くるゝえ
まる女君もいとらうしくあせもあそびもひと川まくひき
かきなつるを中納言も例のゆるにかしまくれどあまりのことかは

きこえなかんよりぬ方のうしろめたくなかるゝるをとり
そあはしおほくおもひなからそのことなかるかきりは母
うへの人々をさへぬあなあなつらしなからさめるを見すて
まいらはいかなるやうゆかりまとひなんこのもくやうのとの
あかしきてはひと日もはなれぬをかいとおほつかなし
とのになほしるなとをまほくそむきてまりてもいとく
はゝはかなくはこそなかめとさはかりをかくしるともおもひ
さはなかれはいはゆるおこなひきてもいそきぬることかたの
いのちこそ今ははかなれあはれこの世のおほえにちかく
すくもあらぬ方をよにいりくは志毛なかく見たまふ人あらん

いさしきすなりしうてありながらいまさらるゝきれまりなる
さるなとをあやしとおもひあやなる人もあらんなとさるくは
いとうれはしのなつかしきなりやうる方ゆかりはいくよもある
ましきなとひとりあらんとおもひしそくやしう思ふくもある
すと宮まとろまはおもひあつきすに程世中に住とあん
うちもおほえは末なんうる事のなかるを程なに
いもなくいそいりましらひつるといふにそこはしとうち
まもる人もあらんなとはくくとおもひあはしうきこえ
こさゆかもなきあかはをかしくゆかくなきいそなみとて女君
をりなとろはいよくひえうきまいりまへかいとたへ

ざればな　月日も　あやしく　ゆるされぬはかなきと見給
なごり　くもりなき　かづらの　かみまでに　御手に　なく　かゝらんぜ
らせつるを　よりあひ　ぬしの　かほる香を　いろに　おかし　おりぞ　など
いかしう　こそ　なげかれ　侍りて　つまも　みえし　后の　ひとへ　有
おぼし　あめ　まかせ　まゐらん　こそ　いと　うれし　かれ　いざ　おかし　きて
みつぎ　いざや　こもりも　せき　すゝん　かしの　ゆく事も　あり
侍るざり　なりや　人々は　たゞ　なるうき　かく　わかれ　そなれぬ
たりを　たゞひ　ならすも　はも　あひ侍る　心もくしきを　こゝろ
こそ　くやしく　たづらしくも　これぐ　あひまゐらせ　侍り　ほど
のどやかに　いとしう　たらし　げなく　あのひとき　やしくざり

そうち　おめうしく　心のうちにも　いかゞく　そうらみ申
うふと　ふかくも　おかしう　おぼゆるに　いとしうも　やうやく　など
の心やかしさは　なきなかで　えもいはれぬ　御はひやうに　うち
わらひ給ふ　まゐるを　見目に　いとゞしき　おもかげに　なれ侍る
まゐるも　こゝろよづき　ことのはも　おぼえねば　なまめかす人　なるべく
やといひ　そきて　はてうづ　めでたく　おこなひ　給ふにも　心ころの
うちにいかく　ふうごき　あながちに　ことのを　くるしう　おもふべき
ゆゑも　なき人は　そこがし　ともよづかはしも　なく　月を
みてぞつん　こそ　いとしう　おもうしかれ　なげやきて　つゆ
なぐさめる　おこなりにける　たぐひめは　いかで見ぬなど　なげいと

思ひとぢめつる心地しくまうでつくづくとまもりゐたる
なかとなくとのおもはしき御心のすさびにまかせて
とりあげくいとしうまたくよみなへなるをききゐし
まゐる女君の御こゝろもたくひなう出しくおとてのぞき而
なくなげきみだるゝをも人はいたづらなきんめづらしう媛
しきことをよろこびおもひく大殿中もおもしろとほのめかし
きこえさせ侍りまゐるを殿はいとあはれに深ましう見まゐ中納言
いまはさまなるに世に知らびなくまじらひたちわかれぶより
なみ身をあなたともさのみおもひなげくべきなかぬをよしと
ともかくいとしくとのおもはしげなる心し見なりもうそうに
あさにあやしきまで殊なるみだれ心やときおどろかるゝも
なくどいかなることぞとおもひきこえなからんも今はいと
ちかうしげなる有様をやといひなからちかうもてえきこえ
いでなんぞ人ぎゝに例ざまにきゝなやしなひ給なるを
中納言は後のあやまちんこと中くうきいかゞおぼえく
いでまじらひも思ふそとこがれしともあはれとも目をかけ
て見る人あらむともあはせばいとゞ人とぶ雲井にとのゐよかく
とてかし世をうきものにおもひなれたるをいまはとてあるに
しも月ごろは女君をもまろうとに深からずちぎりかはし
てあまりしもなつかしうひとつかたくよりなみ方に

たぐひなくうれしかるべきにも心ぐるしうよのつねのまじらひ
などありときくもまことにもなどうちにはよそなども
まちこ給ふよなくくもいかにおぼすらんなどおもひやらるゝも
かく夜におもひきこえしそこらの年ののちにあはれく
もなかるなとおぼしさるらんとおもふにそゞろしくも
あいなくも心のうちにはなきするものしくおもげになのこ
うしなふもそこばかしうるゝれば心とありし雲ゆも
おつびなくぬを女はことかりにいさんるなく見うしう
出しとおぼしいりくうちとけてもさすが見あはせまに
はなくなかのうくもとい寄のなりゆくはかしきを

さかいでもまことのちぎりこそ心にいるゝあとのこ心うる所
あながちにうらみなぐさむべき事もなければかなしきもあら
ぬさまに見えうけおもひさだめするさま深く契りまゐりて
おはしまする折も此ごろにておこなひにのみ心をいれてあし
くらしおはす大殿うち此ほどのながめにありすをめぐらしき
ことそひてはいかもとし心ざしそひあんとおもひしをいとあや
しと人々も見まする後もうへもあはれく中納言のさうし
がちに東宮にこのごろなりまゐるなるはれくおそれずゝ
はいのちやはらんぞるといでゝこれなおそのゝわかし紀出て 紫 脱
あるごとうりいぞかしタぐれのさびしき庭のまより心深ひ

こがねなるさかきのもゝゆかひをまゐらするまゝめでたきを
はべぐと見おくりまつる人々おほゆへめなれどこもぞば
なほとかはしんつゝえせばつゝえことりうちとおひつゞくまに
いゞおもひゆる方なく洞こがれ家まどろまでのゝ夜を
あかしおよぶのゝなげきいゝも人目もえぞうりおゆぐく
せあもびまつる奉りと心よかくうらひなびうさかれ中納言
例の内のはとのゝなるおもく筋の事にきちびきいれなる
を女君かさびしさになるぶにも月かなゝ家中でも人々
かしえゆすけられくいまでかゝりべき有ぞとおぼしいり
なかゞもおなかなるゆきあひのおもくうかりしいかもなきまゝ

○三ヶ月
腜妊し

はまどひいゝるゝきぬなかめうしうあかねげなかゝもえびき
なもぶえしうもまかばもあゝば中納言のいとめでたく
そぐもなかくうらくもく人目えぞり筆けあかきなり
のどやかにきぬよえ間うつしまふうういといゝしく志ぬ
えぞりおもひいゝるゝ人をふきしあるにこゝとおもひなかう
かしえかくも人のとりきゝまんなすとおそろしうそう
えづらしえに人志れぬ袋のゝあらんをしもあはばなりに
かりもともなかゞいとふうしとおもひきゝなかくのゝとのを
のゝおもひあれぐしうてあうしくらばすこしかおぼしも
とうあふに三ヶ月中もあり此れがゝる人えあり志りく

なべて此月ごろましてそこはかとなきなやんこゝ地のうへのこゝ
御なやみはとしごろあまたあるなかにもすぐれてはかなくしまさるも
たしかなるなやみうきざりにさもきこえさせつるを此御事どもまゐる
人々見まゐりてさにおはしけりときこゆればいといみじく
おぼしく思ひろごりて今まで此いのりなどもせざりけるに
こゝさの御あひく中納言のふさしなどのよこ目もせず
ねんごろなるさまにさぞうりの人ぞ御かくしのとゞまるくなくて
もてありしもいかにこそむべきぞいさうちまもりまゐらす
あるさまのかずく世のならひも引しぞつゞきまで
此人のうゑつきに似る人々さてなかなかさが家のひとり

こそにあらめと深くいひつゞけおもひくいみじく思ひて
ひとりおもひく帳のまへにねまつるにいとくるしくて祈まつる
に後の此けのひのちくもれば御きあづかりまつるにいみじく
うれしとおぼしける君わくよりおもひくいかで御なやみ
此きちを今まできゝざりけるに此いのりなどもせさせぬべき
ことく御子泣あまたをあやしうなにたまはこゝ地なやましく
のゝおぼゆるをあやしくうちかへるすゞのちはしのあげてぞ
ゆかしくのゝおぼゆるをましてにさま事もあらば中納言
いかにおぼえんなどしさまゆかく見えまいらせいみじくさそ
おぼえにまどひにあせにありくおはしまればあいなくほどの

ちゝやとくいそしくうれしさとおぼしけるさまでかぎりなき
やうりなひくも春ぐれくさ音なかやなしとおぼしいさ
らぬくよやくはつゝひきこえなひくうへまそくらうりなり
見なくときこえまつぶたづしらもおぼえさんあありけせう
かなきこえなひそとのなさくぶいそやそとまふ大ね女御の
ゆさくそこそ思ひきこえまつも此ゆさとにあつかなるなめり
うゝ志なくなまでしなぬんやあるとし恨思ひきこえし
わいありくうらむ事をあけなつべきつるて御心のとぢも
めでたかうじしもえ見えりなかりしけふは月なりまり
おかしきさんにはのめしきこえまくなどのしまよ程ま中将を

○大将
見ハ男君の
覧し

おかしうりさるやまそぶにかしおなおき春の此人志
御心あるうにあいくしうましうぶいうに思はいとう
まし女には后にありくしもなかくうは世ん此人もとぢひらも
さんのうを色めでたきさまぐつきまかれうしくいうなる事
ゆうあるんとなげきあそを見きてあま御心地をきなあく
そびしういうできえうせなをなきにむかしてしぶとのゝ
おぼしなるをかの人は春陽うじは心をよせなる道の
志なべ哀れはこうちなありさまなどくかしくきくにいう
気まれなびりのやどと思ひ志ゝ作くさがまし侍くまし紀
人目の見ぐるしさも志ゝじぬもうらしてなどいうも

○うの人
宰相なし

まゐりまうでどきをさすべきすなはちがおもひさぶらふ
あはるゝよにぞありける中納言の君はいまはいとあはし
すゑにはあはれにいみじくそのほどおもひいづるにきもと
より山ざ住しときしに此人ならずこそあへあさは
いとどこと人にえやとおもひまうじをまなぶこと人よりも
うちまもりをるにおもはんすのさぶらしうも補くもある
づきなきとおもひよれどさしてさはありがたき事なりけらし
なぞやいきうき世の中にせめくながらふべきをその思ひ
などを添くたどるほどにうる事も出来ぬなどけらし
などちかにおもひあくがれて見えぬ山路のすまゐまゐらし侍

見えぬ山路の引哥し（よのうきめ見えぬ山路へいらんにはおもふ人こそほだしなりけれ）

は心ぞゆかしいぞきかなるその頃吉野山にゐときこゆる
人ありしけりせんていのこのみかどおはしまゐらするまで
のりまうけたくもすりなく世の人の師とせらる
すぐくのざえおんやう（陰陽）てんもん算ときく人など
いふまでこちきゝえるざえどもありける此世に
あまりをちなく（[illegible]）ありしはるがくしやう（留学生）とて十二年に
一度もろこしにまづき人まうしつかはしくにのめのざえ
をならひきたりすゑの代となるまゝに人のまうめこん
しいとなくなりゆくよりもろこし（唐）人絶する
をも思いさらんと世ちにもこひくとりあひにいれぶるを

むすまちうけく日なの人あまたのりきぬとがめにと
うしろ見人ありけれどなくのぎえうゞうしろ見人
なかりきとかどうれあかれくその国の一の大臣なるが
なくいつれうしづきなるひとりむすめをもちてさぶらひ
けさつれなるわざに種なくうちまきり女二人をうみ
おきてその母なくなりにけりあくぬ世の人なるとくも
とのとかくゆつれぬうちもせばこの国にあれん
めぐあのづら女御后みかどの御むすめをえらめて見し
みうえりのうちにおはしける女のたぐひなかりけと深く
いそそめくまかする御心もえひ給かりけりむしらいうき

いよのすけなりやすてその国のうちにかくれいともとげ才をも
まさんとおぼし給へどうきよにさかりまする唯君にぞとう
きんすも出しくおぼしいづれひてしれざりにその大臣も
つひにやまひにつきいのちさへほどなくなりにければ
いまだ有きなくまくありくありめぐるつくもおぼされぬに
その時の大臣と卿まことにむすめとなきたるをみ人を
うかべきも絶しまいかりなれがうけてもきくいたるなかはかり
なりに福ききころなどもいそぎまうくころさんとまくうつするなし
きゝきのいくをしうぬ家とはいふにあらぬ国に
そが身をおさむらしえんすいとまししくをとききとなく

おもひあがめいつくしくかしづく人のあまたこそかくれしよりも
まさるでもありけれありゆくおそろしくつゝめづらしき
ことにいできぬ此女君たちを見すてんもいとをしく悲しきに
とかくこの海に身をしづめんと思ひける人をさせまゐらせて（此語ゆえん）
さすがにえいはでありけるより女はかゝる事をきけ
どいかでかせん永らへてもいまつるもあらばやとてこれも
うびの身にいのちをまてんそもなしつらじとひとぶすに
あがしありくなくありけり大臣の子どもにうつしひく
ふぐる世ゆくえりあふし月日もあし見まうしもいつに
ふうりけるすみかに永のすゞむ鳴く見けこの風こと更に

おくる世ゆく浦のなかにけれどよのあしやもいひなが
されしもの女のそばに子どももありけるなどいはれど
あがしければ此姫君たちをいとをしくうしろしてゐてのがり
かひなくあらぬよのさかひにありてしもかゝりとありなし
雲井までたすらにゐづつり出しやりてもあはれはてゝうち
しのび此君たちをうしなひでつゝ丈人をはぢらく此世に
見すべきものともおぼされどうちなえてなくなくすご
かひけりいづしらん此みこあんおかせけのゆくあからしろ
やならぬふるひく家こそ世の見らなくは限なれと
おぼしよりすといひすいできぬたすらなる山のさかひ

やもをたちつかされぬべきを後のゆくへきこえまほしくて
さる此世に例のうちなくあるおこなひにいでそりに
あらぬ世に絶えてながらへげにつれなく程経ちの法
あつかひそしくまじりぬうんこものつきかさよいかにも
そがよしとのおもひありなきまでとえひさぐしなるいと
くやしきこと多かしなちかくかえらせぬぐしおかしかく
よし野山のみねにおもしろき法やありけるに山居まち
ひぐしいづちともなく人に見えそれでへおひやしより
ほかの音のきこえた御門うしれきなれ音づる人なきよしを
山のこなた雲にうづもれなくきくしおこ眺むるちの法
うちながめのあはれにあさましくたえなくかなしきを
鐘の音もうち山法ほんさんおぼえて人にすぐれたへる
を紙に出しく見まりかひく今はおほえかりこれ
より深く読みとなへおかしきにまたとる人なくいとしき
はありさまとものにひたすら経をえ読みたまへるの
なごりと思はせれどさりともおのづからいきうも人あき
いそかな法のさるべきかたはいつきありと山に深くおぼ
しきりくちぎりきこゆる人を浮かんよにおぼしなる
中納言いとどいでて世にあらじとおぼしつつまゐりつる
あととみちにつけても雪の山をふまじりおて今はゆく

歌よみもてなひこゝろべからん者のうへのうつは
なにおもひをそゝくべき事ありやとおもひまはすにこの
よし野山にゑのはなをくはしくうり出る人ありて
その花ちらさんもなげに世をすてはなるゝひじりのあん
ちうろとはみえながら水の流れ岩のこずゑひも都
のはなづくめなれぬすまゐくしの思ひもなぐさみ月は
心ゆきあるべき住すまひなるとうり出するをきく人あし
すみとはうきをきらひそれが世をそむかんもなげに
山ずまゐのあはれにうつりくそのへのでしにありく
あらんはまほしかる上のおもしろくさびしくすぐれたる心

ちつもなきなもあそでゆきことのしあふじうと人まで
そがみひょうぎりなるよとあはれく歎ずる人をめし
て何のゆかりにおもしなしのおりふしなでとてとふせのよ
そぢに行る人かの家の花でしおとくよるひる花あかり
もたなれではとけにこりとれるひあつるやあそくさま
らふにまづきとれきあひとつしのまうり付りと中に
いとうまし花すりなる歌その家をとし訪いでありま
てまゐりうかひく世に経るきん（琴）あそびまり入見あ
さあふみの事をきあらふきんとあそびつゝきさぞう
きみたなれたる事ある花心によもうけひれあふじとおもひ

さゞなみくちをしくおもひすぐ侍るをかなしき給はせ直
しくおぼしめされバいとゞしくみえさせ給へんといとも
ねんごろなるかしこみまくうちひまへいときはやすみすに
まつらぬありとやませバきこゆ此後のほどにまゐれとの
まふバいたりそばの御にしらく後の権中納言どの
かくしたまはせおほとくかしこきこゆれバきえぐくさる
づき人まゐりなるかせらるとども中させおほすもありしかど
まづくまで世にありけると人ゆもきゝつけらるしくとく
さらにおんきこしめしいれぬとのとありけれバ此ゆゑ
年にあまりきあえまる人もあからめるぞいとあはれなるべきことに

かハいろふもかしきおハりくきこえんとてかへしぞ
めぐらくおんまぎと何しがおもひける人をつらひ
みて侍らせするとやませバさぞらりうちおぼしめぐらして
さぞらりえいまうにまとをれくめでたきてふ（蝶）はな（花）のす
のさそ此はいろしめいろにきおひくら深き山まであが
しいゐんそれもきてつきえんとのしまふ人にぞあらめ
いとらるしくおんたちよらせまへといと心にいりける
宮しきゆくきらくしらけきれあまへといとあやし
かれどあぼしうる所のあまにてそすゞろにころえていと
さまでとくいとかしくさびあへて御りおかんすをおもひ

つまにうくなんの事ハさすとくれバよろこびながら
くりまゐりてくハしきこと由なづくおもひなしぬる
こゝ地してうれしきことかぎりなし　あなうしとこそなん
と人々きゝすてとくちをしあめども此たびあまり世を
そむきなんずあくがるべしとおぼしなんみようなりと
うけひきなかりしぞ人の御有さまを見まゐらせ世なれバ
おみやすどころもちぎりきこえて勤さびふ立帰りなんと
おぼせバ急ぎしくさハがしく見ゆると急ぐ人あれバ
きよみらだせきせに七八日ばかり山寺になん詣るを
そことなきもあれバ山あハてしも人々きゝなどしつく

おこなひもまぎるゝあちこちなどいひまぎらハしなびく
いそぐうちのことゝても女君とハ二三日もはなるべきほどに
おぼつかなかるべきことゝ歎きなげかしきうちうらみ
きこゆるに涙ぐみぬ御さまと見えしを此事の後ハその
御心のうちなる人目もそこはかとなくれバさしもあらぬあり
になるを女君もいとたづしくかなしきものからうちに
つけてもあながちなる人のちぎり深かりぬあはれハこよ
なく有様ときく事もおもふいと心うし中納言も
さらそあハするめとそしれるもそれをしたしむべき由之
ある男かハと思ひ立ちもよろぼそ見まくありがたきぬ

ご禰宜なりける法師もこゝに志ばし人だりきては為め
のと子せうの人志ばしなかにゆかん人だりいざしくしの
びくまうでなる九月ばかりなれば都くはし紀だる
ゆく山のけしきも哀なりかまじえも志つれどゆく
こけへなみもかふかしかるくあはれは後らへなまごとうなふ
しまゐらんとなほつかなくうちあひしそふ人ぞまたう
こそなかゆれましていまはとおひうらんやどく人まかく
なほし志つる
（中務）涼しもさ紀まありこそあやし笛をきくとはもあなゆ山路を
道まり志るべの人さ紀ずてまりまへば法志つゝひさ紀ありい

法くらひく法ぞまりえへあとして給きこえなる日うちいる
きゝなぞなかしけるよし法せうそこきこゆるもいとくよう
いしく入なかしけりらせんもうの所ぐ林の葉をつくし
てあひたるさしあ紀ふ尾もいろはさうむのあそそふ笛
あゐのうちつるぬぎうけるく光をそなたくちかくぐと
あでうくたびやうごくらくのむかへありくくものこしまぜ
ようとも松そ梅りくそる日はしきは法ありさ日ありなす
もえなくちをしくあせぬ世のもる哀なれどうる人み
ものしなひけるまとやどうう仍くとぞうみもりなをふ
いとゞとて志川めくきみうひなるみさの法なきなも以と清

○まへのかどかどしき
よその思
中納言の君を
えんずる

げにおぼしける人のおとなひはやつれまつる春いろなく
うらいとあてやかにあてにやつくりめくおもひなり　きこえ
つる程よりはとく清げにおはしましける物がたりせらく
うちとけゆくまゝにまへのかどかどしき世にあまりてこと
くにすぐれたる人なればうらんとめづらかにおぼえ
昨日まちし人の出なりけんすべてありと此心のうちにさとり
おぼせがいとあはれにうちとけたるかなしさよりの事
どもとゝもにうらしかはりなむといひくありし春出しう　いと
しきめをみて世にある女二人をばみすてゝ例なき
すぢあるをのおとこききつらしとく君にそひてうらうし世の

みだれ中もひとかり程此人々をなほほしかくこそ
より深くも君をえうらみまじきをいひつゞけまつるもあまり
なごしくひがなるたるをみえしあてやかに気はひうち
おぼしのどかなるはしきさる人もなまなどめづらしきさ
なにもなくしきてもよろしきなひさく今の人目は人より
げにはかなくもくちをしみにもあるべきにも侍らぬほどいそげ
なくよりあやしくもまたたがひ人に似ぬ有様かくやく
との御ひるまなる世にありかくかひなる有をきこえ
まへがらなきみえまよふあれぶうちなきのいでしがれに
ものにおぼえべきすなれどそもさびしのすぐいうなる

なを此世のみならずまたの世の為のおこなひなれば こと
さら人のおぼゆべきこの世によそながら人をうらむる
なんどいふもさらなく さとりなきことに侍るべき事にあらじ
いとふべきならずやも侍らば法師は思ひのことうきを
きはめなすべきちぎりいとたかく色のしなはなくかしこ
きこえさせばとも おのづからさいはひきはめしと おぼし あはれなる
すみなれうちて さる人めしくきこえつげじとのこ
まゝをいらふ見なへなりあらん ゆへならに よりなみ身を何由之
なり身をきはむべきなりと おぼさば 女房たちの中よりえう
ぐしき身には侍らずとも 世にめぐらひ侍らんかぎりは
うしろをまもりてん まつるにこそ法のうしろめたくなおぼし
めし〳〵きこえ事のおぼしより家に人にうる事あり
ときこゆを侍りぬをきくべきやあやしと見えしはかりを
きこえ出つるもよのつねのみなど思ひてべきならんよう
なかるも女のこきてつれど様かはるとおもひぬものにてあひ
こなたには人なくては侍るまじきことゞもなりとおほせ
思ひ侍れど人のちぎりなくせられ侍るまじきなれば さらに
此山に世をつくせなどもゆいごんきこしもおもひおきて
侍れどなくせといふもの侍れば そのかたにかなひ侍らじ
人まなかなしうらば おもりかに身をもちひ よろしかるべし

まくらだにまくせに任せてもなんそのやどのいまださすけさ
みやといとふくもしれがうるまくおもひすつるなどうちなれ
てなれどもあさぬゆとの深りかもあはぬめでくあれら
しきゆかりにゆかりとくとろとしうちまさくおぼつか
なくそこなる雲ちごくのそときうど（浄土）のおくまでくもり
なきちぎれさきにまよはぬ山ゆき月のなげきとも有まじく
ろうハあハれもなに出しきすかわくいはしきにまちえぶ
なきこうちもせは此世にまじとてつくづくなりなるなげども
ひろげくえせおのに此中陰のゆかえさとりのたくかなり
とろとし中も有ぶ人事しとおもひ入りしとなかもおとる

まじりなりめづらかなる人なしとおぼしおどろかるゝぞれ
いぶしく文はからせ給ふにおもしろく出しれなりしは
こしよりとてつくづくする文どもにまゐらくはくりいで
うきなまくり身のき筆のきゝめづらかにいみじき人とも
見るかけんじとなれ人こそあはれとおぼしおどろかれてうち
うなづきなよおしぐくあれがめづらしう見なよそうなく
二三月つきぬ家ハ此人のゆかりき方ざえのかぎりなきにめで
おもひもけぶいしまゐりきんのゆくとていとゆうしげに
おぼしぶれぶなうれあそある月にうきなるしまへるも
出しておもしろきすたぐひなしときしぞうりめなれ

きしそきあつれがとりそへひきまつるまゝにあやしうくを
やとまてりくいとおもしろきまでうれなしなびく諸りの
神はきこえさせつるほどものそうかき人にそくときの
給ふにたがひぬひえとりうりとおぼえ給ふが山かしの
よし殿ゝこゝろ山あつしよゝおかしても給ふひが耳ありや
されどこまとさづ御させのへるよろこびゆきうとうそひきこ
ゆづきおも給ふほどく姫君の御ことにこまりおひくうち
人さづ御とのしおひくひごろとのしまへるそこおさとゆく
とのおどきこえのへおつての人の御こゝろにみえぬつかまなあり
ゆくりうに人目おもしうるへかれどうしろめたうにみえざあり

とくまうづきまゐにひれつくろひくあかつきちかういづる月
のきりたちわたりあかつきあはれにはせうそこあれがえもいまだ
かはひらかくまだ夜ぶかくおかしうれがそうしちらく
かゞめまつる姫君ちいとちかうしれて引いりなみをたゞ
きこえんまゝにうそぶりよがらぬ御すがたのかはにかくよめ
つ御にとてかしあかんもふかうりうしろめてにあまりまじ
きそとこしらへときて取消のあるとにおかしぬ御けしきに
まうしかくに引いりくちかゝるきん琴のいとこと葉に
ことそえありしも見ありいとあくとてあそびまつる
人の御すみうと見申うちと（内外）志あくると人けもせぬ水う

うは秋の月ぞあはれなる雨にいろまさるつゆ
となげき女君ちゝの心のうちいかならむといとほしう
いかりしおぼしめさるゝにこのよちかきことはかゝるものこゝち
とのきく〳〵しう深きとのゝ気色などはおぼしもなはじや
あんなれどさしそふるもゆかしけれど人こそもせまほしぶ
（中将）すみぬらん世をおもはむに二つのもつともひかふる
かりなるさまやとなげきいでゝうちなれすべてるにきけいみ
しうなりしう気色なるを都の人々にたぐひなきさるまゝ
のさひにとゆる人おかしましてまことの人々に見えなどひか能
いぬれこゝちも深ましきまであはれなるにはいくなどなげき（面）おぼす

きこえいづつき人もあはれなれどたへがたしかるをなれど久
しうなりもなくいとてあはれ見すこしいなりよりく
旅なる峯の松風見えなくていみじいさん人々ゆかし
ほのかなるけはひいとほしくあてにかなしくよしあり
いかなる程ど都にも見えぬけはひはありがたうおぼゆる
かいづもなかんと思ふもいとゞいとおはれば
（中将）おほかたに松のすゑのこゝろをいふと思ひしに心なし
よつ見のけそらびてはあいなどいとゞ気色はふかくきこえ
いとよしそいうしくなつかしげにいひなしあはれすこしなも
なまめかしうゆくやかをりて深うほしいかなるいつし見

さりし人のけはひはさらへにもなくかくひなくもあまりにこその
宮木はうる人世にとめしなきともいまさきつけぬかや
あはれいたきてまどひしもはくきえんとまづおもひいでらるく
歌有も有明うちかこれ月はく海なくきりもうり
うすき虫のこゑごくこゑりがなしく水の流れ風乃おと
鐘乃音などひとりにきこえく哀をそへなごぞとよ
わけつかとなる雨の夜人のはす春なりけるらすのと
いまぞおもひ侍るぬすみかくたしなくなとうしくこそ
ふうすへらりもかうとうせおひそとくやそりもづへり
おひぬ涙ましくあきもまどひおひくう川ぶしくまる

留ひとり
歌をも兄弟と
あはせとこ

そあが君くならしとませおもひぞ恋しくしれかりきれも
よにゆらんぜしも侍らじうずけなきことなれどあやかなう
留ひとりたくひあるとおやせといとのどやかにあかしう見
こしらへなぐさむれど筝のゆかにおもひさかぎまつるいとこと
はりなに中の君も有にそへくなぎり出なくりつれぶうちそひ
あつるなすびしきつゝぬ人くなどこふいふかとあふくし見
見まもあづるめれどいつとなくうるゆすなひをゆかそれつとく
おひあげくのどもなれぶりうめづらしくめでたし人のおふ
そるときゝてふと兄めきしあなくのすゞとれうちなえ
おそうすふうやうしくかあまぞなのもしげなれやこかいうみ

とくよりくる人もなくとりかきに人のことなしくあや
わくらはにめしくなどもあはれでなげかしげなるま
こものゝおもひさはがんもあはれなりなむにこそのべくあはれ見えで
なしとはみるそのこゝろや人の思らん雨も降まじとおもへば
まへどそこでかのつゝにやすくおぼしなせ世の中にめぐ
らひ給らんさりはいかゞ哀しみさりをはくしてゆらん
ぜるもかしがほと思ひなけるなきあはりおぼつかなく見えて
あはるゝこゝちしていぶせく侍りければうしろめたくなども
人もうとうとしきもよしを思ひまへよりてなんなどきこえ給ふ
にたゞかくまめやかにものし給ふ中の君いとあはれにて引

○うちつゞき
蜻蛉にうち
つゞくいり
かゝるべき
ゆきなれば

うれしくうつゝとも人の身をばなにゝつけてもかなしくてはつきまく
しくいま月にうゝも見えてさせたまひめすらないまだとも
おなじことこそ思ひきこえさすれとうちおほにうちつゞき
なめづきゆゝしきなればよのつねめかしく引とゞめてぞうち
そひなして此世なくんちぎりくらひかしこ女房の寄
ぞうりうとぢつきゆゑもなれをいそでうなしりまかなる人は
あらんでいとよりなくさびしかりゆゑある人のありさまを
なしりなゝめあやしうしるあらもおぼ由ゆゆく
にいとどゝりなくさしたなしとおぼえなき白きひとへさま
ぞうりかようなるゆずいとわざとやかにとのよりめうけいでゝる

きよしくうしつきうへ此かりなつくかなしうちやくも
うるはしとうちきわもいとおかしくあはれなるなるかしゆゑ深く
をてまだらかしまつるそのあいとくるしく白くうつくし
げなるいとんさなくはなうなふとのしなひかりとろ
こしの人ありしくげどやく人に似あはやなどゆりしきに
かえかりこぼれつるをいとあてにみえ色あしきになりまなると
あいもそめでたくいよいよ山のうきりすみちぎりなむとことの
はなさえ見ありいろしくめでたきあはけのはなをうたを
うたふにいとめでたしと見なるゆゑもあらくありゆけぶ出なりぬ
そらしかりける人のなかなかと思ひなくなく涙こぼれきこえなる

中納言
いまの宮もおなれかなしきをみたてまつりても見えやしなはせたまふも
とよめりけめ見るをおぼげにいかなりしかし見ぎたまひを
姫君はあはれなる人のけはひのありしにあはれもなりつるにそこ
えっとなくうちうちなかれつるをいまぞいかなりつるをぞと涙
ましくかなしきこころちさへさがつくおぼえむべかば涙をりて
ものきこえなかねを人くいとしたるかくいぶりきこゆれど
なごばさしもきこゆづきすらふとなくなほあめれば
例のあはれにおもひなりくく月を見てうちなげきこしのあるも
うきあはせくなすはいひてもを三のつきこころもせずなき
なくなく日ごろ多く色深ふかくなげてなきなきときく

までいかなる事ぞなどもおぼしおどろかれ給ふいとまうち
さゝめくおほせごとのきこえまへばいとゞいかでか重ねても
あんなりとて身をばかくぬとのうへにてすべきなるらん
なうへいかにおぼつかなくおぼしなげくらん右のおとゞも
いとゞうらみなげくらん心づくしの御心ひとつにこそ
さしもおぼすめるとなぐさめやるべきおほかるにあさ
も絶こもりゐて出給へとくさかなるもあきの御こゝろもほどゝ
御とのゐどものなどまでこゝにその松風おとふのきまでなる
ぞなりあくるゆくなりゆくかきしもさかぬ人ゝ眠尽
うちの御たまり通なるのたい給へりにありとのゝうちぎなど

またかれいろあひやしくさゝぬきぬあやなどいかなる多く
なりまゝの扇などあづくなどなきをさるなるあまり
こちくることはえらひまてもしとのそほれあきすに
あんなどのひまへど人がいとあてふ心えがげなる心
のまゝもえさひかくてほとしかそつひ給へる人このうへは
さはききこえて心ゆるくなんこもりかくしまへいりなんと
もゝよしをうちくるめくのこまへ中納言もさるなることを
きこえさせんとかくゝる御すまひもうれいかしきこえ給ん
となんおもひなするときこえまへばそんでいましうゆくり
なかんことは御かたの人ぞひんなく侍りなんとなかるもなかりし

さるましき方にたにそはゝうしろめたき君にかく
なからへ侍らぬそくやしきちきりうかりしくはおくりとのにことわりし
よりもてまゐりまつる世なれはこの世につゆいのちぬくすりとも
あるかきりなりける姫君には立よりかきりなきいさしをちきり
しにてもあらはあはれなれか
（中納言）との心あはしに我をそうとましきかなひぬる此の松風
女君もめもあやにあはれしらあはれもけなるはかなさを見きゝんに
何ことしらくしきまさりぬつくおほえく
年をふるきなかひつる松風に心をさへそくへき
我なからきゝん人にみせきかせまほしくめてたしはかなけれ

なにもあらぬさましくくりあまた山のはしにいくよ
かくありけりきるなく日ころはありけるかと気かく
まつ後へまありまくもなふなり二三日うとくそ君ひしを
日ころ見えあかふさりつれは心をまとはしくさらぬ山なくいつく
にとのしあるそよきなれく人にもしれてありきあるを
我いとかくしきこととくく日ころにとのもときくまゐ
さりけるをいかてかまへにとのまゐらせあそひてよしとも
ともかきこしめしよゝかぬなりけるをいかにさるへきなり
けりとうるさきにつけくめてゝさふらふ世にまた君
つきさへふなほしなくさてつゆならはしくいとしと

なげしる比事しき いとあはれなれども くさやうに あくよ
なくめづらしくうつくしげなるを うち見えて つきせぬまなり
おほく女の大殿も 日ごろは思ひなげかれく 心ぐるしき ことの
そひても心ともゆるぬやうになりゆくこそ なげかれなどぞ
さえうる見ゆる人めは めやすくとて なしてこそ などそしへの
まいせく そのうしはてのうによに あはんなどは 程なき世の
急ぐてなく見えまへとく なまらぐさなる 女の大殿には心あると
いひときなひしに 十よかちまで おともせぬうきこゆりたり
つるをおぼつかなく 思ひしにつけて 思ひなげき などは ものも
まゐらせ おかしなげきたるを 女君はとまゆるくのこのを

おぼれと いとほしく 出し給へにつゆにおぼえゆく 世中に
かりそめまじき 事の思ひまさる 人なれば いとゞおぼし
なりにけるぞと いみじくよろこびに思ひこゝろさはぐとも
えさらぬ宮の御事は こまやかに よろしき方と なく／＼もこゝも
まどひなよゆる うちなびききこゆる まかくを めうしと
見よう心にうとましく こゝもとにまめに涼き心ざし
なめれと おもひ来る給ゆく あはれも心あさからずちぎりなき
程などいと心くらうにうち 思ひ乱れたる人ぞなの
うきりなく いみしきを 見るのは ほのかに見る 宮のおろ
まどひぞ ことかりなる はこひに涙にまつはれて 立ち給ふにも

よふくとのそのゝながしまゐらに後ハいでゝなどながしのど
なるあくぬきよめをさへさハぎ女房つぼねよりもあざやか
小さうぞきけさうせなどく立さわぎ昨夜をもなどうくて
ハみなるとせめておこしもてくよろづにはくろみ
もえなおうるはしいくくもきにつりなかなともなもば
とのゝうちに立くもとくのぞ見なくぶ日次のなどかうちに
今すこし水深ひまかり小なるころもしてなおぐとあれ
まゐりハあまりかもこがすゆめくいとのどやかにはいなく
女房にさしよりて物がしと見たまへし山里見送やしきとゝ
などの侍り皆をえ見さし侍りけりつるなどをおぼつかなしと
うづまさせなみやところゝ侍りつるはさき侍るをりくも
ものなかに見ひろびく人多くこそ立まつり侍りぬれときこえ
なみにはいくせんこなくていとゞしくそゞろにそゝとて
まぎてふしくいくつかふさめればさもやいとゞなほりのゝ
こそうしまゐらせなかみにはうらめづらしくやなど枝なかしなほる
とてそ見たまへしなどありけ見まうけくいくつもうらみこし
らくゞうちながめいでかへるぞいとしく心やましき女房
の御袖くちさきそのつきまでゐあてになかあしれさそくと
しくゆくしのひまかりうちぎのさまになきゆき
するもえつきはきくともよのつねなりやきハもなくら月

くしげなる君見てもあらぬころなぞさぐきを君よりぞよ
いひなしていひてもなほよらぬを見たまへるその恥らひ
いといとしくうらめしうはいはれどさしならびまゐる
こと人ならびたまはじよとぞ人かく見なすさまもすなる女君
うちふしても思ひしらるあはれもようちかへしちぎりつる
まろうどに浅からざりし北の方引之こともなく出歯
やうなるなりけるもいとことわりに見ゆる身をいたはしく深く
ましう文などのうちも見いでてなくしもあらぬになかの
うとくもといふ世にそむかれくになりぬるをさはいへどまた
なかぬちぎりをあさくなりしなるにこそはとことわりにうらみ。

本なきに家刀をさびしう思ひ志らもくかげのうげを
うらみてもおほどかにあてにおはせん女はずなかりしう
あはれなるよそのうへひしもこそあはれなるべく見えもと
こもよりふかくなげしながらまたこのあらむよとおもひつみ
なかなかこころうかれどそのまゝにうらみいそんもあいなかれば
さはまたくと世をうりそめに思ひなほみまうらみなるらん
となん